

義経怨霊篇

陰陽師

鬼

ONI



ICHI

法

HOU

眼

GEN

藤木 稟

Fujiki

Rin

KOBUNSHA BI



光文社文庫

長編伝奇小説

おんみよう じ おにいちほうげん

陰陽師 鬼一法眼 <一> ———よしつねあんりようへん 義経怨霊篇———

著 者 ふじ き りん
藤 木 稟

2003年1月20日 初版1刷発行

発行者 八 木 沢 一 寿
印 刷 慶 昌 堂 印 刷
製 本 関 川 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Rin Fujiki 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73429 4 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03 3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

長編伝奇小説

おに いち ほう げん
陰陽師 鬼一法眼 <一>
——義経怨霊篇——

藤木 稟



光 文 社

本文イラストレーション……藤原ヨウコウ
解説……まき牧野 おさむ修



平安末期年表

1167 (仁安2)	平清盛、太政大臣となる
1179 (治承3)	清盛、後白河法皇を幽閉する
1180 (治承4)	以仁王、平氏追討の令旨 源頼政、挙兵 頼政、平等院で敗死 福原遷都 源頼朝、挙兵 石橋山の戦い 源(木曾)義仲、挙兵 頼朝、鎌倉入り 富士川の戦い
1181 (養和元)	清盛、没
1183 (寿永2)	平氏、都落ち 義仲、入京
1184 (寿永3)	源範頼・義経、義仲を討つ 一の谷の戦い
1185 (文治元)	屋島の戦い 壇の浦の戦い 安徳天皇、入水 平氏滅亡 頼朝、義経追討の院宣を受ける
1189 (文治5)	奥州藤原氏、滅ぶ
1190 (建久元)	頼朝、右近衛大将となる
1192 (建久3)	後白河法皇崩御 頼朝、征夷大將軍となる

……吉備きびの大臣おとど唐国からくにに在る時、籠中に居る鬼神一人来たりて、虎の巻を伝ふ。(略)
又、年月を経た後、白川しろかわの鬼おに一法眼いちほうげんと云ふ者、彼の御山に二百箇日、籠満る曉、此の巻
直ちに之を伝ふ。法眼誦行する。故に樂成天下の人従ふ、譬ば草木の随ふ如し……



プロローグ

変事の起こりは京。きやう

時は平安末期。へいあん 藤原摂関家に代わって ふじわら 平清盛が権勢を振るい、たいらのきよもり 武家勢力が台頭し始めた時代である。

都では、実の兄弟、実の親子が政権を巡る血腥めぐさい戦いを繰り広げ、さらにその水面下では陰謀・策謀がとめどなく渦巻いていた。

時局がめまぐるしく変わる不穏な時代の中で、公家や貴族達が心の拠り所としたもの――よそれこそは陰陽師達であつた。おんみようじ 複雑に絡む政界の利害関係、権力を巡る暗闘の連続が「目

に見えない力の流れを読む者」としての陰陽師を必要としたためだ。

当時、都の陰陽道界は、暦道の賀茂家、天文道の安倍家の二大宗家が司っていた。(陰陽五行説は両家のみに継承される秘伝だった)

暦とは日々の吉凶を細かく記した具注暦のことで、当時の貴族や貴族化した武家などは、結婚や外出、髪結いから爪切りまであらゆる行動を暦に従っていた。

この暦を作成し、暦の読み方を教授するのが賀茂家である。
役小角を祖とする陰陽道界の大家・賀茂家は、この時代にはすっかり貴族化し、雅を好んで歌や詩作に明け暮れる者が多かった。

一方、日・月、北斗、南斗、歳星(木星)、熒惑(火星)、太白(金星)、鎮星(土星)、辰星(水星)、二十八宿などの星の動きを読み、吉凶を判じたり、起こりうる事件を予兆するのが安倍家である。

安倍家が陰陽道界の宗家となったのは天才陰陽師・安倍晴明以来であるが、非凡な陰陽師を数多く輩出し、時代の波に乗って栄えていた。

特にこの時代、「指神子」とまで称された安倍泰親の存在を疎ましく思っていたのは、賀茂憲栄その人であった。

そもそも賀茂家こそが宗家、

安倍家など、下層官僚の家筋ではないか

憲栄は扇子の陰で、青白い瓜実顔を顰めた。

数年前、泰親宅に落雷があった時は、思わず手を打って喜んだ憲栄である。ところが、雷は狩衣の袖を焼いただけで泰親の身に損傷はなく、巷では「不思議な事もあるものだ。泰親どのの前に雷公もひれ伏したのだろう」と噂されるようになっていた。

さらに噂を聞きつけた好事家の後白河院が度々泰親を宮中に呼び、綺譚伝を請うていると聞けば、面白い筈もない。

そもそも、賀茂家の先祖が安倍晴明の才を認めて安倍家に天文道を譲り、自らの子孫には曆道のみを継承させた。その結果が今日の安倍家の繁栄なのである。

あの落雷は何かの外連に違いない……

どうも泰親のやる事なす事、芝居がかっておるわ

憲栄は泰親の逞しい風貌や自信を含んだよく通る声、派手なパフォーマンスを思い浮かべ、齒軋りをした。呪ってやりたい所だが、呪い返されては洒落にならない。

憲栄の役職は陰陽頭。おんみょうがしら面倒事が何より嫌いで、歌と酒をこよなく好む貴族趣味の男である。

昨日も泰親が宮中への奏上を行なつたと耳にした憲栄は、身重の妻の見舞いを口実に、仕事を休んでの昼酒三昧さんまいを送っていた。

と、そこへ――

「きゃああー……っ」

ただ事ならぬ叫び声が屋敷に木霊こだました。

治承元年四月某日のことである。

同日、同刻――。

樋口富小路で火災が生じたと聞いた安倍泰親は、大慌おおあわてで陰陽寮おんみょうりょうに駆け込み、陰陽頭・憲栄の不在を告げられていた。

「泰親どの、樋口富小路など都の外れ。左様にご心配されずとも……」
代理を務める賀茂憲実のりざねの第一声はそれであった。

「いやいや、憲実どの。火の星・熒惑たいびが太微を犯し、火災の予兆あり。

推条すいじょう口占くうらにて判ずれば、樋口とは火の口で燃え上がる前兆、富小路とは『鳶とび』小路で、鳶てんぐは天狗の乗り物であり、小路はその通り道を指す。

従つて、この火災は愛宕山あたごやまに住む天狗の仕業しわざであるから、東南の樋口より西北の愛宕山にかけて都を斜めに横切る大火災となりました」

泰親の言葉に一同は凍り付いた。

果たして泰親の言う通り、燃えさかる火の手は都の中心部へ広がり、大内裏だいだいりにまで禍わざわいを及ぼし、帝権の象徴である大極殿だいごくでん、またその間近にある陰陽寮も焼亡させ、平安京百十余町を焼き尽くした後、西北へと駆け抜けて行つた。

まさにその最中、都の空に舞う大天狗の哄笑こうしょうの下に、一人の「禍の子」は生まれ落ちたのである。

辻々には逃げまどう人々の阿鼻叫喚あびきょうかんが渦巻いていたが、憲栄の妻の屋敷だけは、凍り付いたような静寂に包まれていた。

「お赦ゆるしくださりませ……お赦ゆるしくださりませ……」

憲栄の従姉妹いとこであり妻である滯みおの方は、異形いぎようの赤子を前にただ泣き崩れていた。

こ……これは蛭子ひるこか、鬼か？

直ちに吉凶を占つた憲栄はこれを禍と判じ、賀茂家に懸かかる罪穢つみけがれをこの異形の子に背負

わせて川に流す事にした。

「禍の子は水に清められ、その業を落とすであろう」

彼は慌ただしく大祓を行ない、葦の船に赤子を乗せると、火事騒ぎに乗じて鴨川に流してしまった。

しかし、この子は死ななかった。

偶然なのか、天命なのか、川下に流れ着いた赤子を拾い上げたのは、安倍泰親の乳母であった。

泰親はこの流されて来た異形の子をサスラ神の使いと判じ、養い育てる事にした。

この大火を皮切りに、都は頻繁に火災・震災・落雷などの天災や飢饉に襲われ、瀕死の状態へと追い込まれていく。

治承二年には再び大火、三年に銭病（天然痘）の流行、四年の旱魃と洪水に至っては、餓死者が街頭に溢れ、幼児は道路に棄てられ、強盗・放火が横行、下級官僚の餓死までが記録されている程だ。

また、政権にも大異変が相次ぐ。

治承元年六月、旧藤原勢力と源雅俊の孫など後白河法皇の側近がクーデターを計画。

計画は未然に漏れて失敗するが、これに激した平清盛が院政を廃止し、法皇を幽閉するとい

う事態に発展する。

翌二年、平清盛の娘に男児が生まれ、平家は最盛期を迎える。だが、この幼子（安徳天皇）がわずかに二歳で皇位についたことから、後白河法皇の皇子・以仁王が反乱を決意。源頼政をはじめ源氏が次々に挙兵し、木曾（源）義仲や源義経らの活躍を経て、源の頭梁・頼朝が鎌倉幕府を成立させるに至るのである。

人々は、都を襲う不幸の連続は崇徳天皇の祟りなのだと噂した。

崇徳天皇とは後白河法皇の兄である。不遇を託った為に反乱を起こすが、逆に後白河らの陰謀の果てに流罪となった。自らの行為を反省した崇徳は、この世の人生こそ失敗したが、せめて後生菩提の為に、経文五部大乘経を写経する大事業を行ない、それを都の寺に納めてほしいと後白河に送る。だが、後白河は「呪詛が込められているのでは」とこれを疑い崇徳に送り返してしまふ。

崇徳は激怒し、それからは髪も切らず、風呂にも入らず、爪も切らず、目は爛々と輝くという異形の様と化したという。

そして自らの指を食い破った血で経文の裏にこう記す。「我は日本国の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん。この経を魔道に廻向する」——そして京の空を睨みつつ憤死したのである。

民を皇となさん……つまり、天皇家を没落させ、どこの馬の骨ともわからぬ人間を日本の国王にしてやる、と呪いをかけたのだ。

神である天皇の祟りというものが、いかに人々を恐怖に陥れたか、想像に難くない。果たして、初めに平氏が起こり、法皇は幽閉され、次に木曾義仲が天下を取った。

武家同士の争いに巻き込まれた京都は、義仲軍に追われた平家によって火を放たれたり、また上洛した義仲軍によって強奪を繰り返されたりと、混乱を極める。

この時、義仲を討ち、京に一時の平和を取り戻したのが、彼の従兄弟にあたる源義経だ。義経は続いて、一の谷（神戸）、屋島（四国）と逃げる平氏を追いつめ、遂に平氏を滅亡させる。それは恰も鬼神のような闘いぶりだったという。

だが、意気揚々と京へ戻った義経に対し、兄・源頼朝は直ちにその追討を決意する。義経を朝廷傘下に組み入れようとした後白河法皇の機先を制する為である。

安徳天皇の即位から義経追討の令旨まで、わずか五年間——。嵐のような激動に都は揺れた。

一方、鎌倉にはその間、武士の都が築かれつつあった。そして、この鎌倉の権力を朝廷に認めさせる為の陰謀や駆け引きが様々に行なわれる事となる。

建久三年（一一九二）、最後まで鎌倉を否定し続けた後白河法皇が崩御。

同年、ついに源頼朝は「征夷大將軍」すなわち全国武士の頭梁となり、鎌倉の地位を朝

廷に認めさせたのだ。

——こうした激動の時代をいかに巧みに生き抜いていくか、権力者達が時局の行方^{ゆくえ}を知るために縋^{すが}り付いたのは、またしても陰陽師達であつた。

権力と財力を持つ者達は、加持^{かじ}・祈禱^{きとう}を常に欠かさず、降りかかる災いから我が身を必死に守ろうとした。自らを陥れる陰謀に対しては呪い返しを行ない、呪いが打ち返されれば、再びこれを打ち返す。そうした行為に、彼らは莫大な財を傾けていった。

陰陽師は乱世の陰にこそ狂い咲く花なのである。

狂乱の世の中、稀代の陰陽師・安倍泰親の庇護^{ひご}の下で、くだんの赤子はすくすくと成長していった。

建久八年（一一九七）六月、鎌倉の都、由比ヶ浜。
開かれて間もない都・鎌倉は、細かな律令も未だ整備されておらず、僧兵や京都から追放された念仏僧などが徒党を組んで横行する無頼の都市であった。

曇天である。

鉛色の空に、太陽の白いコロナが鈍い輝きを放ちながら揺れ動いている。

緞帳のように重々しくたれ込めた黒雲の先端から、今にも雨粒が落ちてきそうに見えるのだが、じらすが如くに雨は降っていない。

雨雲に遮られ、曙光はごく僅かしか地表に届かない。その為に風景は色を失い、輪郭線も曖昧である。

なだらかな海岸線を持つ浜の海も銅鏡のような灰紺色にくすみ、薄墨で描かれた絵の如くに現実感を欠いていた。

ただ、浜に聳える大鳥居の朱色だけが、不吉な予感を秘めて一際鮮やかに映えている。
その鳥居を中心として、市が開かれていた。